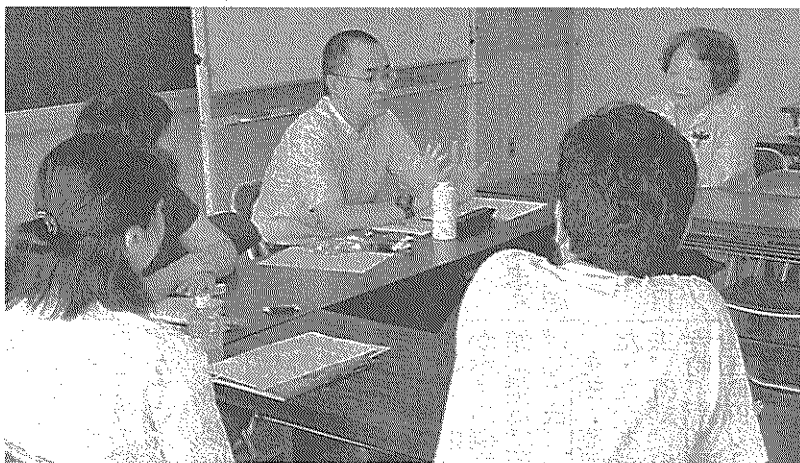


非行、不登校 悩み共有

親の会「からっ風」5年目

非行や不登校を経験した児童生徒の親が、悩みを話し合う団体「親たちの会 からっ風」の活動が5年目を迎え、参加者は20組に達した。親同士のつながりは深まり、会はそれぞれにとって心の支えとなっている。世話人の内山平蔵さん(59)は「親は自分を責め、孤立しがち。悩みを話せる場を必要としている人は多い」と話し、参加を広く呼び掛ける。

参加広く呼び掛け



子育ての悩みを話し合う内山さん(中央)と参加者

同会は月1回、主に高崎市中央公民館で活動している。都内で活動する「親たちの会」の存在を知った内山さんが、2011年7月に立ち上げた。活動のルールは三つ。「何

を話しても自由」「人の話をじっくり聴く」「互いのプライバシーを守る」。それ以外の決まりは設けず、各自の参加ペースも自由だ。

同公民館で19日に行われた活動には群馬、埼玉両県から6人が参加した。それぞれが近況や悩みを話し、その後は自由に会話する。学校教育の在り方などについて、和やかに談笑した。西毛地域に住む母親(51)

は、長男が中高生時代に不登校になった。接し方に悩んだ2年ほど前から参加し「いろいろな人の話を聞き、子どもに寄り添えるようになった」。長男は高校を中退したが、高校卒業程度認定試験を経て、ことし大学進学した。

東毛地域から参加した母親(48)は、次男が非行に走った。「学校からは問題児扱いされ、この会を知るま

で誰にも相談できなかつた」。次男とどう向き合うか不安があるという母親に、他の参加者から親身なアドバイスが寄せられた。

内山さんは、子どもが問

題行動をすると、その背景を考へることなく、子どもや親の責任を問う風潮が社会に強いことを懸念する。「非行をする子を排除するのではなく、向き合うこと

こそ大切。会の活動がその力になれば」と話している。活動の問い合わせは内山さん(8090・6170・0257)へ。